

切られた、我等は、曾て日本の國民性を信じ、日本の上層階級の道義心に期待した。然し乍らそれによつて労働階級の解放も向上も期せられぬ。行詰れる經濟組織の改革も、日本國家のためは何等衆身の躍進も見ることが出来なかつた。

普通選挙は、また我等に絶望を興へた。依然として黄金がソレを支配することを知つたのである。而して共産主義、サンジカリズム、社会民主主義、アナキズム、國家社会主義、フアンズムは日本の労働者をして一醫學者の前に於けるモルモット以上のものはせず、労働階級の先進分子たる組織労働者は、ゴノために對立抗争、七花八裂の惨を極めたのである。

この渦中に陥む労働階級は、昭和六年九月十八日の滿洲事變を契機として抬頭せらる。及資本主義的愛國運動に、また期待するところがあつたのである。然るに之亦資本の攻勢を受け、骨抜きとなり昭和七年末より次第に衰退を續げつゝある。

しかし下ら 見よ、之等特權階級の死力を盡しての攻勢また攻勢によつて幾度か我等の聲は後退を余儀なくされた。それにも拘らず、資本主義は次第に崩壊の過程を

辿つてゐるではないか、しかも必ずや我等の連撃の行進曲は既に力強く我等の耳朶を打ちつゝあるではないか。

我等は過去の輕佻浮薄を斥けて、飽く迄も堅實に進まなければならぬ。我が日本労働組合總聯合の如き、既に早くよりその点を指摘して、嵐を衝いて來たのであるが、今や進撃の門戸に當り、益々我等の使命重大なる痛感することである。即ち我等は強烈なる戰鬥的精神を養ふと共に、また産業人としての自覚を深めなければならぬのである。

労働者が産業人としての自覚がないならば、資本家の横暴は痛撃し得ず、自らの代つてその經營の苟くは當り得ないものである。労働組合運動は飽く迄も自主的に確信に満てる運動でなければならぬ。生産者としての充實した信念こそが、初めて労働條件の維持向上は勿論、その根本的な改革の迫力となるのである。

我等は最早も空疎なるデマゴグの言葉に惑はされることなく、只管 産業人としての自覚を深め、『労働組合主義の徹底』を期し進んで、なほ統一ならざる日本の『勞